

一 次の文章を読んで後の問いに答えよ。

いくたびも雪の深さを尋ねけり

明治二十九年の冬に書かれた句であるが、文句なく『懶祭書屋俳句帖抄上巻』中の最高作であろう。こういう句に出会って、読者は本当の意味で子規の文学にふれるのだ。ここでは、子規自身が近代俳句に求めたものが、最高の状態で詩を生み出すことに成功している。「実際の有のままを写す」写生の方法は、病床で動くことのできない自身の姿を描けるようになった。その肉体をではなく、外界の「雪」を想像しようとする心のかをである。「A」がそれこそ写生の言葉なのだ。たずねる内容が「B」であることによって、この句はけっして静止することなく、降り続く雪とともに時間の中を動いていく。そして「C」は文字通り季の約束によって、外界にある冬の季節全体を表現する a ケイ機 たりえていく。ここまでくれば、もはや配合の妙などは無用なのだ。

1 子規が写生をと考えたのは、それが俳句という形式にとつて本質的なものだと考えたからではない。先に引いた『病床六尺』の箇所にも「写生といふ事は、画を画くにも、記事文を書く上にも極めて必要なもので、此の手段によらなくては、画も記事文も全たく出来ないといふてよい位である」と書いているように、写生は、近代の芸術すべてに通じる普遍的な原理として考えられている。さらに、「これは早くより西洋では、用ひられて居った手段であるが……然るに日本では昔から写生といふ事をおろそかに見て居った為めに、画の発達を妨げ、又た文章も歌も総ての事が皆な進歩しなかつたのである」と続けてみせるとき、2 子規は絵にかいたような近代主義者である。写生とは「A」一なよりも近代主義の理念であつた。

その理念にしたがつて、子規はみずから写生画をかき、写生文を書き、そして俳句にも写生を応用しようとしたのである。「イ」「じつは俳句はそう簡単にはいかなかった。俳句の形式が、そこに写生を持ち込むにはみじかすぎたというより、もともと写生とは別の原理によつて短詩型であるからだ。そこで出てきた配合という考えは、あきらかに写生という理念の修正であるが、逆の見方をすれば、「ウ」発句の(つまり「写生といふ事をおろそかに見て居った」時代の)「伝統的な技法を受け入れたことを意味する。ただ、子規が c 終始」カ ンして疑わなかつたのは、「写生の趣味の変化多き」ことであり、「エ」「写生の趣味」は「天然の趣味」と同じものであつた。それはほかでもない、子規自身が自然の風物をこよなく好きだつたからである。

人間よりは「I」が好きなり。

子規が3 露伴に認められず小説家を断念したとき、碧梧桐に宛てた手紙の一節である。先に引いた虚子宛ての「ほくは小説家になるを欲せず、詩人になることを欲す」という文面とともに、よく引き合に出される言葉であるが、こっちは子規の本音だろう。小説の道に挫折した結果とはいえ、子規が俳句に没入していくことができたのは、それが「I」I という「天然を写す」文芸だつたからである。すくなくとも子規は俳句をそう理解した。そして自分が好きな「I」I は同じように他の人々をも楽しませるはずだという d 力 信のもとに、子規の写生は成り立つていくように思える。

制作年順に配列された『懶祭書屋俳句帖抄上巻』の俳句は、後半になるにしたがつて写生の腕が上達したり、あるいは配合がうまくなつてくるようには見えない。また、子規が病床から動けなくなるにつれて、写生のモチーフが変化してくるわけでもない。明治二十五年から二十九年まで、子規は同じように「天然を写す」俳句を書いていくだけだ。そして白状してしまえば、読者はそこでかならずしも「写生の趣味の変化多き」を楽しむというわけにはいかない。そのなかで、たとえば「いくたびも雪の深さを尋ねけり」という名句にいきなり出会うのである。

この句がわたしを感動させるのは、病床で動くことのできない子規の生活を、読者のわたしがあらかじめ知っているからだろうか。たしかにそれは否定できない大きな要素にちがいないが、しかしそのことだけで名句が生まれるわけではない。じつはこれには「病中雪二句」という前書がついていて、そのもう一つは次の一句である。

雪ふるよ障子の穴を見てあれば

この句はわたしの心を動かさない。作者は病床から動けないために、障子の穴を通して外の雪を見るしかない。そういう知識をもって読んだところで、この句はやはり凡句なのである。わたしは先に「いくたびも」の句について、言葉が外界の「雪」を想像しようとする心のなかを描いているのだと書いた。しかし「雪ふるよ」の句には、4それだけの射程距離がない。作者はおそらく「D」「D」という言葉によって、体が動かさぬ無念さを表現しようとしたのだが、逆にその作為が、俳句の言葉を平板にしてみました。

だから、「A」という言葉の力は、作者の無心さからくるものだ。5俳句に写生を持ち込んだ子規の試みは、技法としてはけつつきよく成功していない。ただ、写生という理念を自身にeカすことで、子規は「天然」を前にして無心になることができた。その無心さが、作為の外側で言葉と定型をうまく出会わせたとき、俳句は、その背景にある子規の生活を素朴に映し出してくるようにみえる。そのとき作者の生活は、あらかじめ読者に与えられた知識ではなく、俳句という作品の内容なのである。

仁平勝『俳句が文学になるとき』による

問1 二重傍線部a～eの言葉のカタカナの部分の漢字を含む言葉を次の①～④の中からそれぞれ選んで記号で答えよ。解答番号は、aが① bが② cが③ dが④ eが⑤

- | | | | | |
|---|-----------|----------|------------|-----------|
| a | ①要人をケイ護する | ②滑ケイな話 | ③業務を提ケイする | ④ケイ約を結ぶ |
| b | ①諸国をヘン歴する | ②ヘン西風が吹く | ③持ち主にヘン却する | ④雑誌をヘン集する |
| c | ①カン闘精神 | ②生活習カン | ③初志カン徹 | ④カン話休憩 |
| d | ①優れた人カク | ②産業カク命 | ③外界とカク絶する | ④正カクな計算 |
| e | ①収入に力税する | ②負力をかける | ③相手を力小評価する | ④力物列車 |

問2 空欄「A」A～Dに入る言葉として最も適切なものを次の①～⑥の中からそれぞれ一つ選んで記号で答えよ。解答番号は、Aが⑥ Bが⑦ Cが⑧ Dが⑨

- ①尋ねけり ②雪 ③雪の深さ ④見てあれば ⑤いくたびも ⑥障子の穴

問3 傍線部1「子規が写生をと考えたのは、それが俳句という形式にとって本質的なものだと考えたからではない」の説明として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。解答番号は⑩

- ①日本の伝統芸術は写生という考えがないので発展しないということ。
②俳句と写生は別の原理であり、互いの理念が相容れないということ。
③俳句にとって写生の理念は、俳句の伝統ほどは大切ではないということ。
④写生は俳句のみならず、あらゆる芸術の根本的理念であるということ。

問4 三カ所の「I」に共通して入る言葉として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。解答番号は⑪

- ①巧言令色 ②美辞麗句 ③花鳥風月 ④冬虫夏草

問5 傍線部2の「子規は絵にかいたような近代主義者である」の説明として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。解答番号は⑫

- ①子規は、近代的な人のように思われているが、近代小説を書けない能力の低い人だということ。
②子規は、江戸時代までの文芸の考え方から進歩しない、見かけだけの近代人であるということ。
③子規は、芸術の上で近代的な写生の理念を理解し、実践する典型的な近代人であるということ。
④子規は、近代的な理念はあったが、重い病気のため、その理念を実践できなかったということ。

問6 傍線部4の「それだけの射程距離がない」の説明として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。解答番号は13

- ①言葉の持つ含蓄や深みに乏しい
- ②言葉に比喩や寓意がない。
- ③雪との距離感がなさすぎる。
- ④読者の心を斟酌できていない。

問7 傍線部5の「俳句に写生を持ち込んだ子規の試みは、技法としてはけつきよく成功していない」の説明として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。解答番号は14

- ①「雪ふるよ」の句は写生句だが駄作になり、写生でない句が名句といわれる皮肉な結果になったのは病床の子規を想像する読者の鑑賞力が原因である。
- ②「雪ふるよ」の句は写生句だが駄作になり、名句といわれる句は、雪景色を空想している自分の心を描いたという点で写生の理念は達成されていない。
- ③子規は写生ということに懸命になったが、重病で寝たきりという悲劇的な現実生活では、写生の理想・理念を俳句で実現することはできなかった。
- ④作品は、作者個人の現実生活から独立しているべきだが、子規が重病だという知識がなければ句の真意が理解できない句は失敗作といわざるをえない。

問8 空欄「ア」に入る語として最も適切なものを次の①～⑤の中からそれぞれ一つ選んで記号で答えよ。解答番号は、アが15 イが16 ウが17 エが18

- ①けれども
- ②しかも
- ③よしんば
- ④だから
- ⑤すなわち

問9 傍線部3「露伴」は幸田露伴のことであるが、幸田露伴の作品として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。解答番号は19

- ①細雪
- ②それから
- ③金色夜叉
- ④五重塔

二 次にあげる四字熟語の□の中に適切な漢字を入れて四字熟語として完成させよ。答えはそれぞれ①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

ア 意気□合	①気	②迎	③融	④投	解答番号	20
ウ 鎧袖□	①色	②食	③触	④飾	解答番号	22
オ 虎□眈々	①師	②死	③子	④視	解答番号	24
キ 順風満□	①帆	②月	③淡	④潮	解答番号	26
ケ 明鏡止□	①争	②闇	③月	④水	解答番号	28
サ 自業自□	①足	②得	③爆	④棄	解答番号	30
イ 以心伝□	①信	②心	③真	④親	解答番号	21
エ 隔□搔痒	①蚊	②靴	③華	④夏	解答番号	23
カ 時代□誤	①錯	②作	③策	④削	解答番号	25
ク 大義□分	①大	②親	③名	④半	解答番号	27
コ 臨□応変	①機	②貴	③器	④危	解答番号	29
シ 一喜□憂	①万	②千	③三	④一	解答番号	31

三 つぎの江戸いろはかるたの意味として最も適切なものをそれぞれ次の①～④の中から一つ選んで記号で答えよ。

ア 花より団子	解答番号	32	イ 葦の髄から天井のぞく	解答番号	33
ウ 芋の煮えたもご存じない	解答番号	34	エ 子は三界の首っ枷	解答番号	35
オ 亭主の好きな赤烏帽子	解答番号	36	カ 身から出た錆	解答番号	37
キ 門前の小僧習わぬ経を読む	解答番号	38	ク 知らぬが仏	解答番号	39

①絶大な権力を持っている者には我意をを曲げて従うこと。

- ②見識の狭いこと。
- ③自分の悪い行いや過失のため自分が苦しんだり災難を受けたりすること。
- ④普段見聞していると習わなくてもそれを覚えていること。
- ⑤当人だけが知らずに済ましているのをあざけていう言葉。
- ⑥親は子を思うために一生束縛されがちであるということ。
- ⑦風流より実利をとること。
- ⑧自分より地位や実力が上で何かとじやまになる者。
- ⑨物事にうかつな世間知らずをあざける言葉。

四

次のA～Eの対義語として最も適当なものをそれぞれ後の①～⑨の中から一つ選んで記号で答えよ。
解答番号は、Aが40 Bが41 Cが42 Dが43 Eが44

- A 運動 B 解雇 C 華美 D 浪費 E 高騰
- ①暴落 ②質素 ③座学 ④安価 ⑤儉約 ⑥派遣 ⑦静止 ⑧採用 ⑨醜悪

五

次の1から8に該当する作家名をそれぞれ後の①～⑨から選んで記号で答えよ。

- 1 『小説神髓』で横写論を主張し、『当世書生気質』で実践した作家 解答番号 45
- 2 小説の文体に初めて言文一致体を採用した作家。 解答番号 46
- 3 擬古典主義の代表的作家で、雅俗折衷体により『三人妻』を著した作家。 解答番号 47
- 4 浪漫主義運動の先駆者で、同人誌「文学界」を創刊し、泉鏡花等に影響を与えた作家。 解答番号 48
- 5 森鷗外に絶賛され、『にぎりえ』『たけくらべ』を著した女流作家 解答番号 49
- 6 浪漫詩人から自然主義作家へと転じ、『夜明け前』で家と自我の問題を追求した作家。 解答番号 50
- 7 耽美派の中心人物で明治の物質文明を批判し『腕くらべ』で江戸文化に回帰した作家。 解答番号 51
- 8 白樺派の代表作家で、『暗夜行路』を著し、「小説の神様」とまでいわれた作家。 解答番号 52

- ①正宗白鳥 ②二葉亭四迷 ③島崎藤村 ④永井荷風
- ⑤北村透谷 ⑥尾崎紅葉 ⑦樋口一葉 ⑧志賀直哉 ⑨坪内逍遙

六

次の説明に該当する文芸雑誌名をそれぞれ後の①～⑦から選んで記号で答えよ。

- 1 近代日本最初の純文学結社「硯友社」の機関誌。 解答番号 53
- 2 森鷗外が主宰し、活動の中心とした雑誌。 解答番号 54
- 3 自然主義理論と作品発表の中心となった雑誌。 解答番号 55
- 4 与謝野鉄幹が主宰した「新詩社」の雑誌。 解答番号 56

- ①ホトトギス ②文芸時代 ③明星
- ④新思潮 ⑤早稲田文学 ⑥我楽多文庫 ⑦しがらみ草紙